

にこそ真の力が存在する
中で永遠に生き続ける命

対 談
リレー

認知症の人は「何もわかんない人」ではありません。
「本人ならぬ他人」であるか否かによって、
本人の心は、誰よりも鋭く、
世界を捉えている。そして、
自分自身を捉えている。そして、
世界を捉えている。そして、
自分自身を捉えている。

伊勢真一 監督

親父に反発して汗を流す大工の仕事をしたもの
空を見上げる癖が災いして逆に見つけた天職
無我夢中になれるものが自分には必要
ドキュメンタリー映画を難しい暗いと言っ
たのは誤解
記録することから何かに出逢い何かが見つかる
シナリオを超えて見えてくる様々な未知の世界

伊勢真一氏

ドキュメンタリー映像作家

1949年東京生まれ。『奈緒ちゃん』『えんとこ』をはじめ、数多くのヒューマンドキュメンタリーを製作。『風のかたち』文化庁映画賞・カトリック映画賞受賞。『大丈夫。』キネマ旬報文化映画第1位、『傍（かたわら）〜3月11日からの旅〜』キネマ旬報文化映画第6位。2012年日本映画ペンクラブ功労賞、2013年度シネマ夢倶楽部賞受賞。近作は『シバ 縄文犬のゆめ』（2013年）、『妻の病 - レビー小体型認知症-』（2014年）、『ゆめのほitori - 認知症グループホーム 福寿荘-』（2015年）、『いのちのかたち - 画家・絵本作家 いせひでこ-』（2016年）。最新作は『やさしくなあと〜奈緒ちゃんと家族の35年〜』（キネマ旬報文化映画第3位）。

人の強さに力があるのではなく弱さ 限りある命を生きて死すとも映像の



永田久美子氏

認知症介護研究・研修東京センター研究部長

新潟県三条市生まれ。千葉大学大学院（看護学）時代から認知症の本人と家族が共に安心して自分らしく暮らしていくことをテーマに活動と研究を続けてきている。東京都老人総合研究所を経て、2000年より現所属。当事者の声を聴きながら当事者や関係者と共にこれからの暮らしや地域を創りだしていく研究スタイルを模索しながら、長年に亘って国内各地で脱領域のネットワークを育て、認知症になってからの生きがいづくり、認知症の人の行方不明ゼロ作戦、地元のを活かしたやさしい地域づくり、本人自らが声をあげて誰もが暮らしやすい社会を目指す当事者組織「日本認知症本人ワーキンググループ」の活動などを続けている。

映画は生きてきた証を伝えるポジティブなメディア
撮影される人をどんどん元気にしてゆく
大人が言う徘徊も子どもが言えば冒険になる
自分出来るのは粘り強く諦めずにやり続ける事
観てもらふ事で映画は映画になる
一人でも多くの人に観てもらふ真剣な努力を



ドキュメンタリー映画の 記録性が持つ価値

永田 お久しぶりです。伊勢さんはドキュメンタリー映画を制作されていて、丁度台湾の映画祭から戻られたばかりです。今日は宜しくお願います。

伊勢 こちらこそ。新作『やさしくなあと』奈緒ちゃんと家族の35年』の上で台湾とアメリカに行ってきたんですが、日本以上に反応がよくてね。

永田 言葉が通じなくても映像では伝わるんですね。

伊勢 特に台湾は若い人が多かったですね。

永田 若い人が映画に来るといのはいいですね。

伊勢 現在日本では、ドキュメンタ

リー映画を観に来る人の年齢層が非常に高く、どうして若い人があまり来ないのかなと考えてみると、まあ忙しいんだろうなあとか、ドキュメンタリーは難しいとか、面白くないとか、暗い等の印象を持たれているのかなと思いますが、それは誤解です。最近、私の「監督のつぶやき」というブログにも書いたけど、「食はず嫌い」の様な「観ず嫌い」じゃないですか。

伊勢 認知症に関する映画は『妻の病』と『ゆめのほとり』ですね。

永田 撮影のスタイルとしては、ひとりの人を追いかけて、最も長い人は35年ですね。

伊勢 最新作『やさしくなあと』で、障がいのある姪っ子と家族が35年間、頑張つて生きていくという話です。

永田 それが映像で残るといのは様々な分野にとつて、とても貴重だと思います。

伊勢 勿論、若い人に観てもらおうと言う真剣な努力が足りないのかもしれないけど、面白いですよ、ドキュメンタリー映画は。今の時代を生きている自分や家族や周りの人を映像にしているの、「他人事」じゃないと関心を持つことから、その人がやりたいこと、知りたいことが見え、持続的にものごとを考えられます。ともかく入口まで来てもらおう作戦を考えなければ、台湾に行つて強く思うようになりました。

永田 初めてお会いしたのは4、5年前で『ゆめのほとり』の試写で、あまりにも衝撃が大きく言葉が溢れてきたので、パンフレットにも寄稿させていただきました。

伊勢 仕事は、やり続けるというのが一番大事だと思います。35年撮つてしつかりした哲学が生まれたかというところでもないんだけど(笑)でも、自分に出来るのは粘り強く諦めずやり続けることです。

永田 シナリオを超えて人を撮っている、ドラマ以上にいろんな変化や歩み、様々な生き方、未知の世界が見えるんじゃないですね。

伊勢 とにかく記録するというのが大事で、それを読む人、見る人が作品と出会うことで初めて何かが見つかってくるわけで、気がつい

たら35年の記録になっていました。

永田 人を撮っているのに時代性も一緒に記録できて、すごいことだと感じました。

伊勢 動画の持つている情報量や記録性はすごいですよ。記録映画の歴史は、まだ100年にもなりません。でも記録しておくことで、今の人だけじゃなく10年後か50年後か100年後の人に何かを語りはじめるといいかな。

永田 ドキュメンタリーは特別ではなく普通の日常が残されていきます。突き進んでいる中で、いつの間にか忘れ去っていた変化を映像が気づかせてくれるんですね。

伊勢 つくり手として自分を「褒めてもらいたい」という気持ちもあるけれど、それ以上に映像そのものがず

ら35年の記録になっていました。

永田 人を撮っているのに時代性も一緒に記録できて、すごいことだと感じました。

伊勢 動画の持つている情報量や記録性はすごいですよ。記録映画の歴史は、まだ100年にもなりません。でも記録しておくことで、今の人だけじゃなく10年後か50年後か100年後の人に何かを語りはじめるといいかな。



©いせフィルム

「ごい力を持っている事に関心を持って欲しいです。」

**病気や症状ではなく
人そのものを記録する**

永田 さまざまなテーマの作品がありますが、私にも関係が深い認知症をテーマにした作品、1本目の『妻の病』は、どのぐらいで完成したんですか？

伊勢 主人公の石本浩市さんは友人でもある小児科医で、小児がんの記録を撮っていた10年の間に、奥さんが若年性の認知症になられたのが『妻の病』を撮るきっかけでした。

永田 最近では、認知症のドキュメンタリーも増えてきていますが、普通に暮らしていた女性が時間の経過の中でレビー小体型認知症を発症し、変化



©いせフィルム

していく様子を記録した『妻の病』はとても稀有なケースです。元気な時から長期間に亘り、しかも症状ではなく、ひとりの女性を撮っていたというのも貴重です。小児科の専門医で非常にすぐれたドクターでも、何が起きているのかわからず、克明に奥様の変化を書き留めておられたのが印象的です。

伊勢 私の中では、認知症に対するジャーナリスティックな関心以上に、友人夫妻の闘いを「記録してあげたい」という想いが強かったのは確かです。ただ症状を撮るのだけなら医学映画でいいわけです。認知症のことを新聞や雑誌や放送にわかりやすく紹介しようというプロ意識はわからなくはないですが、その積み重ねが誤解や偏見を生んでいますよね。

永田 問題のところだけが摘み取られて報道され、認知症の人に対する偏見になつていたりします。でも『妻の病』のご夫妻を見て深刻な面もあるけど、観終わった後、一種の爽快感がありました。自主上映会が各地で開かれています。

希望が見えるような気がしたという方も多いのでは。

伊勢 配偶者が、そして自分自身も認知症になるということは十分に起こりうる、病気になったり、老いたりね。その時どうなるんだろうという不安感を誰もが持っているんです。『妻の病』という映画はきれいな事ではなく、「自分は妻と一緒に暮らしていない。共倒れになつてしまふ」ということを体験しても、認めることができない、というのが苦しみに繋がっていたけれど、奥さんの認知症が更に進行していく時に、結局受け容れられる様になつていくんですね。これは病気なんだと受け止め、認めて、一緒に生きて行けば、また違った関係が築けると思います。

永田 このご夫婦は奥様が認知症になつたことで、ある意味「つれあいがいることで自分が生きていく」という面もあつたように感じました。奥様が認知症になることで、自身の人生も消えていく様なつらさもあつたでしょうし……。

伊勢 撮り続けてきた姪っ子の記録、小児がんの子どもの達の記録、認知症の人の記録に共通しているのは、

本人が病気や障がいと一緒に生きていく時、手助けが必要な存在が身近にいて、その人の優しきや様々な可能性を引き出すんだよね。「強きに力があるのではなく、弱きにこそ力がある」と思う、「ああ、本当にこの人がいてよかった」と思うような感じが「受容」なのではないかと思えます。

永田 『妻の病』でも深刻な大変さがある中、本人が鼻歌でタンゴを口ずさむ瞬間がありました。人間つて、つらさを抱えながらも面白い面や豊かな面が出てきて、問題もあるけれど捨てたもんじゃないと思わせてくれます。ドキュメンタリーって深刻なテーマももちろん大事ですが、人間をなぞつた時に希望が見えてくると言うのもすごい方法論だと感じます。ポスターも夫婦睦まじく認知症の本人とご主人が寄り添つて、日常の中で一緒に歩いている、絶対的な存在感の時間があります。事実を撮り続けていく中で存在の力が出るということを観てもらいたいです。

伊勢 永田さんが関わっておられる自主上映会には、どんな方が来られますか？

永田 若者も小中学生もいて、「認

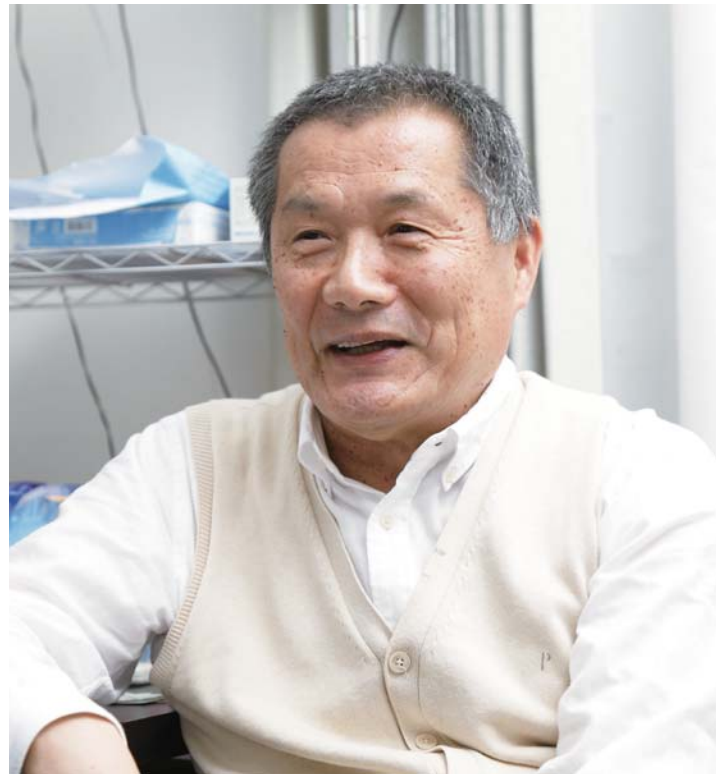
知症のこと」をすごく真剣に観て、気づくんですよ。

伊勢 子どもや若い人は分らないし、興味がないと決めつけてしまうのは大人です。認知症になつてしまったお年寄りがフラフラと出ていった時に、近所の子どもが見ていて「おじいちゃん、向こうに行ったよ」とか、又子ども達が公園で遊んでいるのを、お年寄りがベンチに座りながら見ていることもあるし、つながっているんです。

永田 お互い見守り見守られ、ですね。大人が言う「徘徊」も子ども達は「外に冒険に行きたいんだよ。一緒に歩いて行く」って言うんです。

伊勢 『妻の病』のあとの『ゆめのほとり』は認知症のグループホームの話ですが、公園に散歩に連れて行ったら、遊んでいた子ども達がおぼっちゃんと分かり合つて話をしているシーンがあります。

永田 専門的知識やスキルは必要だけど、それがないとコミュニケーション出来ないみたいです。町での出会いや大化してしまいます。町での出会いやチャンスがあれば、どんな世代とも関わりができます。その方がむしろいいと思つてしまいます。



全員が主人公の グループホームの記録

伊勢 姉が知的障害の作業所を起ち上げた事で、知的障害の人との付き合いも昔からありました。その後、『ゆめのほとり』というグループホームの映画を作ったわけですが、「認知症の人は、ちゃんと分かっているんだ」と思います。知的障害の人や認知症の人、あるいは2、3歳の幼児等、言葉が伝わらない存在は、物事が分かっている、考えていないのかと言うと

大間違いで、いろんな事を考え、想っているんです。傍にいと判ります。話さないということは、他の人を受け止めることは出来ても伝えることがうまく出来ないというだけで、誰にでもある人間的なことですよ。ずっと通つた認知症のグループホームは、ただ行つて傍にいて記録していただくだけの映画なんです。

永田 それはすごいことですよ。周囲がコントロールして本人を動かす、ということは往々にしてあります。本人は言わないけど気づいているんですよ。言われるがまま、なすがままに生かされていくことへのつらさや悲しき、みじめさを感じています。言葉は優しいけれど、実質は本人の時間をコントロールして、手つ取り早く処理してという感じで、ルールに乗せられた様な対応が問題になつてきています。それは、傍にいないと見えません。たまに来るご家族や行政の人は、テキパキ動く職員の姿に「よく働いている」という印象を受けますね。

伊勢 ここはいいグループホームだ、と思つたりね(笑)

永田 本当の意味でじーつとそこにいると、その人がどんな反応をするのか見えてくることがある。本当はつらいんじゃないか、放つておいて欲しいんじゃないか、何か言いたそうだけど、もうちょっと待てば言葉を発したり、もつと出来る事がある人だよ、等、傍にじーつといるからこそ見えてくるんです。

伊勢 子どもの頃「はい！」つて発言するといひ子だと言われたけど、発言する人がいたら聞く人もいないからね。大人になつて、主張することが善で、主張しないのは仕事が出来ない奴だという烙印は、かなりの錯覚だと思

いますよ。認知症のおじいちゃん、おばあちゃん達は、そういう事を教えてくれました。撮影現場で「監督だからテキパキと、黒澤明さんみたいにカメラマンやスタッフに指示してやるのかなあ、と思ったら、伊勢さんはただ傍にいてポーツとしてるだけですね」って(笑)。でも撮影する人、照明の人、録音の人、あるいはマネージメントをする人、それぞれの役割があつてひとつのプロジェクトが成り立つわけですね。何もしないでポーツとしている人の存在があることで映画が出来るんだと言うんだけどね(笑)

永田 そうしていたから、みんなが本当に天真爛漫で、いつもの地のままで、ありのままをカメラの前にさらけ出せたのは貴重だと思いました。

伊勢 そのグループホームのリーダー武田純子さんに完成前の状態で観てもらった時に「こんな姿、見たことがない」と驚いていました。「きつと若い男たちが(俺は別に若くないんだけど、おばあちゃん達から見ると若いから)来たので、いいところ見せようと思つたのかしら」って。「私は綺麗に映っているかしら」とか、気になるって素敵なことじゃないですか。「あ



のグループホームはずごくいいな」と思つたのは、そういう空気感があつて、ある上映会で、施設の方だと思いますが手を挙げて「どうしてジャージを着ていないんですか?」と言われてたことがあるんです(笑)一般的には、ジャージにポロシャツという所が多いんじゃないでしょうか?

永田 そうですね、でもあのグループホームの職員は、皆私服ですよ。

伊勢 質問された人は多分批判的な意味だつたと思いますね。

永田 価値観が全然違うんです

ね。職員は皆、制服を着る、と。

伊勢 「何かあつた時に困るでしょう」と言うけど、例えば「正月だから赤い服を着て行こうかな」って赤い服で行ったら、おばあちゃん達が「あら!綺麗な赤い服、私も着替えてこよう」と着替えてきたりする、それが普通だし自然だと思えますよ。

永田 何人かいる職員が、ひとりひとりのつながりや個人の楽しい話を全部切り捨てられて、職員A、B、Cになつてしまうのは、本人から見てもすごく寒々した光景で、あの人が誰

なのか、誰に話しかけたらいいのかも憶えにくくて、とても非人間的な場になつてしまします。『ゆめのほとり』と言う、とても文学的な優しいタイトルですが、今までの医療や介護の方法とか難しい事ではなく、どういう場があつたらもう少し希望を持つて歳を取つていけるか、こんな歳の取り方もあるんだとか、又、認知症になつても、暮らしを一緒に大事にしてくれる人がいれば、暮らしを丁寧に営んでいけばいいんだと、感じられます。同じ介護保険の制度の下に、現在、1万数千か所のグループホームがありますが、15年以上経つた今、何を大事にして小規模なグループホームが出来たのが脇に追いやられ、残念ながら管理的な面だけが重裝備になつていきます。職員や行政任せにせず、自分の事として一緒に話したり、遊びに行つたりできたらいいな、と思います。この映画は、難しいことをやらなくても、特殊な環境や装備に大きなお金をかけなくても出来る事はあるんだということが記録されていて、どんな研修よりも人材育成にいいと思います。

伊勢 この作品は、みんな、ひとりひとりが主人公。そしてひとりひと



©いせフィルム

年以上で、今はできるだけ早めに気づいて、元気に働いて活躍できるという傾向があります。認知症が進んで年も取ってだんだん言葉が出ない、自分では決められなくなつて、一気に周りに管理される暮

が出来上がった時に、「福寿荘」の撮影させてもらった人達に観てもらったんです。全部で50人ぐらいたったかな、自分たちも映っているから、笑いも出て。途中で出てきた人を見て、一番前のおばあちゃんが「あんた、ここにいたの！」って。そう言われた映画に写っていたおばあちゃんは、3か月前に亡くなられていたんですが、要するに、このおばあちゃんには映像の中に映っているから「いる」と受け止めているわけです。それでいいと思うんだよね。

元気に走り回っていたその子達の映像がたくさん溜まっていました。小児がんは不治の病ではないということを伝えたくて創った『風のかたち』の時に、亡くなった子ども達を映画の中に思う存分入れられなかったのも、もう1本『大丈夫。』という映画を製作しました。「この子達はこの時こんなに元気に夢を語って生きていた、だから映画の中で生き続けているんだ」という思いで。認知症でなくても、撮影していた人がいなくなるという事はあるわけです。映画はその人がある時間をしっかりと生きたという事を、伝えることが出来るポジティブなメディアだと思えますね。

り違っていて、ひとりひとりがちゃんとそこにいるということを感じてもらうようにしたいなと思つて創りました。分かり易さを大切に作るテレビを見慣れていると「いったい何を言おうとしているのか分からない」つてなつたりします。

らしになつてしまうという大きな問題があります。でも『ゆめのほとり』は、言葉が出なくて自分で出来なくても、「俺は俺だ」、「私は私よ」と言う暮らしが実現できることを見せてくれます。

「死んだ事を理解していない」とか「映画は過去に撮影したものだ」と言うのではなく……。

永田 すごくポテンシャルが高いですね。記録としてあれば、観た人の想い、生きてきた証、時代の総てが伝わっていきます。ドキュメンタリーにしか出来ない大きな価値があると思えます。

永田 自分で感じたり考えたりせずに、説明を待っているという感じね。伊勢 ナレーションも何にもないから、でも、その空気みたいなものを「そういう世界があるんだね」と感じられたら、力になると思いますね。

伊勢 「認知症なのに」とか「障がい者なのに」とこんな事が出来ると言うことがあるけど、誤解ですよね。何も出来なくていびきかいて寝てる、いいじゃない、と思つてもらいたいな。生きるということは、そんなに都合よく、「こういう事が出来てこの人は立派なんだ」ではないからね。

伊勢 映画つてすごいと思う、老人に限らず誰でも限りある命を生きて死ぬんです。でも、映像でとらえていることは、ある意味永遠にその中で生き続けるという事です。以前、『風のかたち』と『大丈夫。』という小児がんの記録映画をつくりました。8割は治るようになりましたが、治るのが難しい2割の同じ病気を抱えた子ども同士で語り合おうというキャンペーンをしました。10年の間撮ったので、亡くなつてしまふ子ども達も毎年出てくるわけです。前の年には

伊勢 「遺影」つて、家に写真を飾っていたり、財布に入れてたりしますね。それが動画で残っていると、声とか仕草とか雰囲気とか、その人のことを感じさせますよね。先程の35年の記録を撮った動機も、「長く生き

映画のなかで

生き続ける人たち

永田 認知症の番組等で注目されているのは、非常に長い経過を辿ることです。認知症は平均15年から20

永田 立派に過ごしている認知症を求めているのか、と。

伊勢 勿論、パラリンピックを観れば「すごい！」と思うし、素直に素晴らしいと思えますよ。『ゆめのほとり』

伊勢 勿論、パラリンピックを観れば「すごい！」と思うし、素直に素晴らしいと思えますよ。『ゆめのほとり』

ないかもしれない」姪っ子を残しておきたいと言う気持ちで撮りはじめたんですが、どんどん元気になって(笑)案外、撮影されている人を元気にするのかもしれない。

永田 撮影されることが、自分の存在をすごくしっかり感じたりできる機会だからかもしれないね。ドキュメンタリーを観たり自主上映会を開くことも、繋がりを考えることになり。時代や生き方を写し取り、それを通じて今、自分達はこんな生き方でいいんだろうか、とハツとさせられる面があります。こういう時代だからこそ、ゆつたりした時間軸のドキュメンタリーを仕事の中で伝えたい、仕事自体を記録として残していくことが大事ですね。

伊勢 認知症の劇映画は結構あって、どこの国でもだいたい「名優」が主人公を演じています。ちよつと古いけど森繁久彌さんが有吉佐和子さんの『恍惚の人』を演りましたね。でも、『ゆめのほとり』に出てくるおばあちゃんやおじいちゃんの名優ぶりは見事です。カメラがある事を充分に意識して、それであんなに素敵な「芝居」が打てるのはすごい。例え言葉が出な

くても、言葉が出ないもどかしさを表情で、全身で、ありのままに表現しています。ドキュメンタリーを好きでやつてるのは、そういうことなんです。

大工から映画の世界へ

きつかけは「空」だった

永田 上映はどのようになっていますか？

伊勢 殆どの映画は、製作したものを配給宣伝の会社を取り仕切つて上映する形ですが、配給とか宣伝とかいう仕事があることさえ知らずに映画を創り始めたので、私は自分でやっています。

永田 かなり珍しいスタイルですね。

伊勢 「どこで観られるんですか」とか、「DVDはないですか？」の問い合わせもあります。「自主上映できないと見られない」し、意地悪してDVD化してないんじゃないかと、映画として見てもらいたいという気持ちが強いです。認知症にしても知的障がいの子どもがいるお母さん等、一番観たいと思っている人が家を空けられない事情もあるから、DVDも勿論考へてはいますが、基本的には出来るだ

け自主上映というスタイルにこだわっています。

永田 認知症のケアの方では、DVDにして誰でも手に入れられるようになるという声もあります。が、それぞれに貸し出して、自分の中で完結してしまつて対話は生まれません。一長一短あると思いますが、自主上映で皆が会場に集まつて多くの人が一緒に観るわけですね。『妻の病』の主人公は高知出身なので、高知の浜の波と、月が雲に隠れたり見えたりの様子等、生きる時間と自然の



時間が交错している様でした。映画館のスクリーンで観ると、「生きて、消えてゆくつてこういう事なんだな」と言う様な、映像の力に共感します。

伊勢 自主上映自体をずっと地域でやっている人や、やつたことがないけど是非やってみたくとか、お問い合わせを頂いています。ホールを借りるケースもあれば、お寺の講堂、教会、学校の体育館もあります。そして、間違いなく映画は観てもらふことで映画になるんです。だから、編集室やスタジオで「傑作ができた」と悦んだり、試写室で映画評論家や皆でベスト10を決めたり賞を決めたりしても、そこまでは本当は「映画」じゃないんです。さっきの福寿荘の「あんた、ここにいたの」という感覚で見られて初めて映画になるんです。やっぱり観てもらふということがすごく重要ですね。

永田 2本目の『ゆめのほとり』の音楽は全部マイムマイムのアレンジで、湖のほとりで踊っている物悲しいマイムマイムのシーンもあれば、おばあちゃん達が少女の様に踊るシーンなどバリエーションがすごく豊かです。伊勢さんはあの映像を見ながら音楽が湧いてきたんでしょうね。

伊勢 映画は、映像も音楽もおしゃれでありたいと思っています。「ドキュメンタリーはその問題さえ語られていればいい」と言う人もいますが、自分が「あ、いいな」と思うようなことを積み重ねていくことが、映画を創る喜びだし、ボスターも「あ、いいね」という様なものを作りたいですね。

永田 ところで、伊勢さんがドキュメンタリーを撮られるようになったきっかけは何でしたか？

伊勢 実は、親父が記録映画の編集者だったんですが、離婚して一緒に暮らしていなかったで、思春期の頃は親父を憎しみの対象みたいに思っていたこともありました。高校生から大学生になって、だんだんそういう感じではなくなってきた時にがんで急に亡くなって、映像関係の人が葬式の時に、親父と同じ仕事をしていると誤解して「よかつたらうちの仕事を手伝つて下さい」と言ってくれたんです。その頃、働くという実感を持つには汗を流してやる仕事、と思つて大工をやっていたのですが、時々ボーンと空を見上げる癖が災いして、クビになっていました。そんな時「今、空いてますか？」とプロデューサーから連

絡があったのですが、映像の世界では「今、作品が入ってますか？」という意味で、本当に仕事がなく空いていたので出かけて行ったら、編集の前段階の膨大に回っているフィルムを1時間半ぐらいいまともな仕事で、「親父と同じ映像の仕事だけはやるまい。あんなのは一人前の人間がやる仕事じゃない」とずつと思つていたのに、やりはじめたら結構面白くて、夢中になってその仕事を仕上げたら、そのプロダクションに出入りする人からも「今度うちの仕事も手伝つてほしい」と言われるようになりました。そのうち現場に出る様になって、又空を見上げたら現場の大先輩達から「入ったばかりなのに、天気をちゃんと心配してるんだ」と、大工の時とは逆に褒められて、「これは天職だな」なんて思つてやめられなくなつてしまいました(笑)

永田 そうですか(笑) いいお話ですね。
伊勢 ちょっと面白可笑しく言ってますが、嘘じゃないんですよ(笑)でも、人の向き不向きなんて分からないよね。映像の仕事に限らないかもしれませんが、始めた時も「夢中になる」と言う事が多分自分に必要だつ



たんですね。だから今もまあ、夢の中と言うか・・・。「無我夢中」と言う言葉が好きなんです。我が無くて夢の中、変に、ちよつと引いた感じで自分の事を冷静に考えたりしていたら、こんなに長く続かなかつたでしょうね。殆ど冷静に考えないので、そのことで怒られたり批判されたりすることもあるけど、「もつ」といいものを創れたら」と言う事だけを想い続けてやってきました。もつといいものが創れたら自信を持つて「是非、ドキュメンタリーを」と後輩にも勧めたいところですが、人気なんでしょうね。ドキュメンタリーをやるうっていう人は、映像を目指す人の中で100人の内5人いるかないないかじゃないかな？あとは劇映画やアニメーションでしょ。

永田 最初にもおっしゃっていましたが、ドキュメンタリーは暗いというようなイメージがあるんですけど

自主上映の問合せ

〇三―三四〇六―九四五五
(いせフィルム)